



Title	古墳時代前半期における副葬品配置の対称性
Author(s)	三浦, 俊明
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 251-260
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105044
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

古墳時代前半期における副葬品配置の対称性

三 浦 俊 明

はじめに

日本列島の古墳と東アジア諸地域の墳墓を比較すると、日本の古墳には墳頂部に大きな平面があり、墳丘立面が截頭形を呈することが本質的な特徴として強調されている（松木 2020）。この独特な墳丘形態は、墳頂近くの高い位置での埋葬とその儀礼で用いる大きな平面が設けられたことに由来するという。墳頂平坦面の整備やその直下にある埋葬施設での副葬品配置は古墳で執行された儀礼の具体像として考究されてきた（今尾 1984・2009）。埋葬や儀礼のあり方は古墳の構造を決定づける重要な因子として改めて評価していく必要がある。

古墳の埋葬施設における副葬品配置は、これまでの研究によって時期的な変遷とともに、近畿地方を中心に広がる共通性やそれと異なる地域性が明らかにされてきた。その一方で、階層差や系統差などの同時期の変異について十分な検討が行われてこなかった。本稿では、古墳時代前半期における副葬品配置の対称性に焦点をあて、副葬品配置に様々な変異が生じた歴史的背景を考察してみたい。

1. 研究の現状と課題

古墳の副葬品配置の研究は、配置が複雑多岐に発達した前期古墳を中心に進められてきた。副葬品の配置は棺内と棺外に分かれることが早くから指摘され（小林 1941）、1980 年頃から配置場所の性格の違いが論及されるようになった（用田 1980）。今尾文昭は副葬品配列を棺内、棺外、槨外の 3 段階に整理し、各段階の配列が埋葬施設の構築を中断して執行された儀礼行為と推定した（今尾 1984・2009）。さらに、棺内外の配列に近畿中部の前期古墳で共有される画一性を見いだすとともに、棺内のみに配列された古墳は関東や東北地方に集中するという地域性も明示した。

古墳時代前期には棺外・槨外の副葬品配置が発達したが、中期になると、多くの副葬品が棺内に納められるように変化する（藤田 1989、鈴木 1996、岩本 2004）。棺内配置への変化の要因として挙げられたのが粘土槨の採用で、竪穴式石槨と木棺の間にあった空間が粘土槨でなくなり、棺内に収容されたと説かれた（小林 1959、用田 1980）。しかし、粘土槨は古墳時代前期

中頃から普及し、棺外・槨外の配置が堅穴式石槨と同様に見られるため、中期への変化の要因になったとは言い難い。

古墳の副葬品配置を通史的に検討した光本順は、古墳時代前期に棺内の配置が被葬者の頭部を中心としたのに対し、中後期には配置が他の身体部位へ分散し、着装的配置が増えることを明らかにした（光本 2001）。さらに、前期から中後期への変化として、対称的な配置から非対称的な配置が増加し、同じ場所に異種の副葬品が区別されずに置かれる配置から同種の副葬品がまとめて置かれる配置へ移行したと指摘した。

既往の研究では、前期古墳と中期古墳の間で識別された副葬品配置の相違に注目されてきたが、中期以降に増加する非対称的な配置と同種型の配置は前期後半の一部の古墳に出現したと言われている（光本 2001）。また、前期後半には剣の近接直交配置が中期につながる新しい要素をもつ新興の古墳で行われたという見解が示されており（福永 2000）、系統差を表す事象として捉えられる。前期と中期の副葬品配置を対比するだけでなく、地域性を含めた幾種の変異が同時期の副葬品配置に生じていた可能性を視野に入れておく必要がある。

本稿では、埋葬施設における副葬品配置のうち、棺外・槨外の配置の対称性を検討したい。古墳時代前期に棺外・槨外の配置が盛行した近畿中部（畿内）では、棺内の副葬品は銅鏡や玉類に限られる傾向にあり（今尾 1984、宇垣 1997）、銅鏡の頭足分離配置（福永 1995、岩本 2004）以外に、棺内配置の対称性を検証できる事例が少ない。また、棺外・槨外の配置では、棺の短辺（小口）側の配置は非対称になる傾向が強いため（光本 2001）、長辺側の配置の対称性を分析する。対象とする時期は古墳時代前期～中期前半で、前期は仿製三角縁神獣鏡の出現を指標にして前半と後半に二分する（小林 1956）。中期は帯金式甲冑の出現以後とし（橋本 2005）、前半は甲冑の鋳留技法導入期（鈴木 2014）までの時期とする。

2. 副葬品配置の対称性

古墳時代前期の副葬品配置の特徴として、複数段階にわたる配置の反復とともに、棺の長辺の左右などに副葬品を対置することが挙げられている（今尾 1984）。こうした配置の対称性は、対称から非対称へ漸移的に変化したと理解されている（光本 2001）。そこで、棺外・槨外の長辺両側に配置された副葬品の種類と数量を比較するため、近畿地方を中心に各古墳の事例を表 1・2 に列挙した⁽¹⁾。なお、古墳の墳丘規模によって副葬品配置の様相が異なるため（鈴木 1996、寺沢 2006、藤原 2012）、表では各時期別で墳丘規模の順に配列している。

対称的な副葬品配置の典型例は前期前半の奈良県黒塚古墳（図 1-1）である。棺外長辺の左右⁽²⁾で副葬品の数を比較すると、右側の西棺外は銅鏡 17 面・刀剣類⁽³⁾ 20 点に対し、左側の東棺外は銅鏡 15 面・刀剣類 11 点を数える。被葬者の右側が重視された可能性が指摘されるが

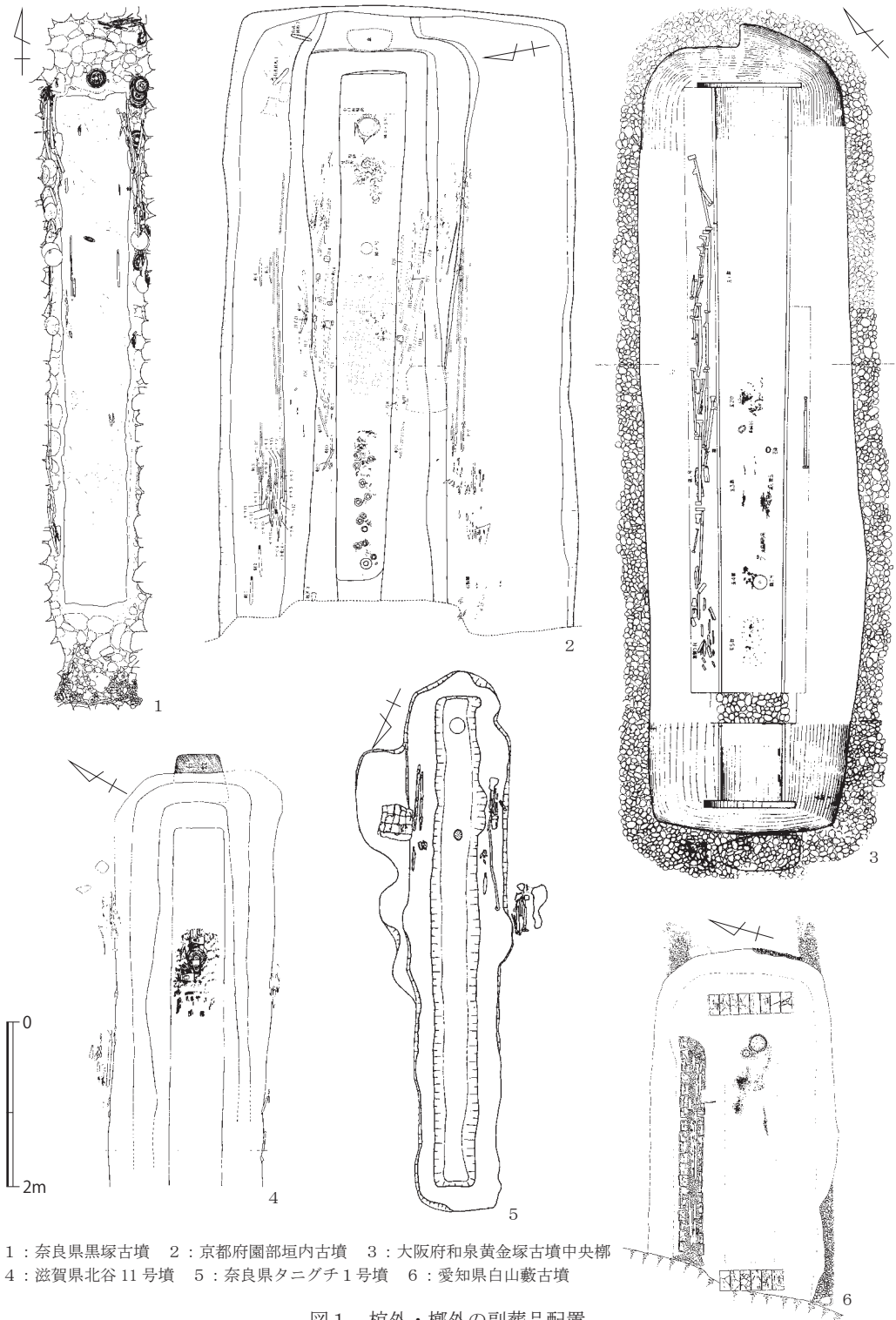


図1 棺外・槨外の副葬品配置

(水野 2022)、鉄鏃は西棺外 86 点、東棺外 126 点で左側が多く、威儀具とみられる Y 字形鉄製品は 2 点とも東棺外で出土している。棺外の副葬品の数量は、種別にみると左右均等でないが、左右で器種を違えて補い合う関係にあることがわかる。

棺外・槨外の左右で副葬品の数量が相補関係にある古墳は前期後半にも認められる。棺外・槨外の配置数が多い刀剣類と鏃(矢)に注目すると、左右で相補関係にある典型例として、大阪府紫金山古墳・京都府園部垣内古墳(図 1-2)が挙げられる。紫金山古墳の竪穴式石槨では鏃が 165 点出土し、全て右側の西棺外に限定されるが、刀剣類は東棺外のほうが多い。石槨の上部外縁で左右に分かれて出土した槨外の刀剣類も東側が多く、棺外・槨外を合わせた総数は東側が西側の 2 倍以上になる。園部垣内古墳の粘土槨では、棺外・槨外から出土した鏃の総数は南側が北側より多いが、刀剣類の総数は北側が多く、南側の 2 倍以上になる。奈良県東大寺山古墳・福岡県一貴山銚子塚古墳・大阪府庭島塚古墳では、棺外・槨外の左右で刀剣類の数の差は小さいが、刀剣類の少ない側に鏃が重点的に配置される相補関係が認められる。

以上のような対称的な配置の一方で、前期後半には棺外・槨外の長辺片側に偏って副葬品を配置する古墳が併存する。千葉県手古塚古墳・福岡県若八幡宮古墳・愛知県白山藪古墳(図 1-6)では、複数の刀剣類と鏃が棺外・槨外に副葬されているが、いずれも片側のみに配置される。長辺両側に副葬品が配置された滋賀県北谷 11 号墳(図 1-4)・奈良県上殿古墳・奈良県タニグチ 1 号墳(図 1-5)でも、刀剣類や鏃が左右いずれかに偏って多くなる。北谷 11 号墳の粘土槨では、右側の北槨外から出土した刀剣類が南槨外より多く、鏃は北槨外のみで出土している。農工具も北槨外のほうが多く、鍬形石は 2 点とも北槨外からの出土である。

農工具の副葬でも、左右両側に分けて配置される古墳と片側に偏って配置される古墳が混在する。前者は紫金山古墳・熊本県向野田古墳・千葉県新皇塚古墳北槨・大分県免ヶ平古墳第 1 主体部で、いずれも墳丘長が 50 m 以上の前方後円(方)墳である。これらより墳丘規模が小さい古墳では農工具が片側に偏る配置になり、刀剣類より偏在する傾向が強い。上殿古墳・タニグチ 1 号墳では、農工具や刀剣が容器に納められた状態で棺外・槨外の片側に置かれており、これらの副葬品の配置が偏る一因になっている。

古墳時代中期になると、長大な木棺では棺内に多くの副葬品が納められるようになり、棺外・槨外の配置数は前期より減少した。ただし、一部の竪穴式石槨では棺外の配置が継続して認められる(藤田 1989)。規模の大きい前方後円墳では長持形石棺を納めた竪穴式石槨が採用されるが、良好な調査例に乏しく、大規模墳の副葬品配置の様相は明らかでない。石棺は長大な木棺に比べて棺内の空間が狭く、棺の構造によって副葬品配置が異なっていた可能性がある。中期前半の新相段階に馬具が副葬品に加わるが、馬具は基本的に棺外に配置された(黒田 1988)。配置数は少なくなるが、棺外・槨外の配置が中期に衰退したわけではない。

中期前半の古相段階では、前期に引き続き、長大な木棺を納めた粘土槨の棺外・槨外に多数

表1 棺外・槨外の長辺に配置された副葬品（古墳時代前期）

所在	古墳名	墳形	規模	場所	左右	鏡	刀剣	鏃	工具	農具	その他
前 期 前 半											
奈良	黒塚	方円	134	西棺外	右	17	20	86			刺突具1、不明鉄器1
				東棺外	左	15	11	126			Y字形鉄製品2、有機物製品2
香川	高松茶臼山 第1主体部	方円	75	北棺外		1	2				
				南棺外			8	4	(3)		土師器壺1
滋賀	雪野山	方円	70	西棺外	右		3	72			靱1
				東棺外	左		2	27			(木甲1)、革製品1、木製品1
愛知	東之宮	方方	67	北棺外	右		15	(4)	2(+2)		不明鉄器1
				南棺外	左		10	(1)			
大阪	真名井	方円	60	北槨外	右			9			
				南槨外	左		2	15			紡錘車形石製品3
静岡	新豊院山2号	方円	28	南槨外	左	1	2	44			
福岡	潜塚 2号棺	円	25	西棺外	右						不明鉄器
				東棺外	左			47			
前 期 後 半											
奈良	東大寺山	方円	130	西棺外	右		18	223			
				東棺外	左		19(+1)	約103			巴形銅器7
大阪	紫金山	方円	110	西槨外	右		9				刺突具2
				西棺外			11	165	12	1	紡錘車形石製品1、筒形銅器1
				東棺外	左		19		4	6	紡錘車形石製品2
				東槨外			28			1	刺突具2
福岡	一貴山銚子塚	方円	103	北槨外	右		5	14			
				北棺外		4	5				
				南棺外	左	4	5				
				南槨外			7				
熊本	向野田	方円	86	西棺外	右		3		13		
				東棺外	左		3		14		
京都	園部垣内	方円	82	北槨外	右		22		1		有孔鉄板2
				北棺外			16	28	3		
				南棺外	左		10				板甲1、(弓)
				南槨外			7	130+			(靱1)
大阪	庭島塚	方方	61	西棺外	右		5	88	5	1	籠手1、筒形銅器1、靱1
				東棺外	左		3	103			籠手1、筒形銅器1、(弓1)
千葉	手古塚	方円	60	東槨外	左		4	60+	1		
千葉	新皇塚 北槨	(方方)	(60)	北棺外	右		1		2	2	不明鉄器1
				南棺外	左				5	1	不明鉄器1
大分	免ヶ平 第1主体部	方円	50	北棺外	右	1	6		16	3	不明鉄器1
				南棺外	左	1	4		17	1	
兵庫	丸山1号 南石槨	方円	48	北棺外	右				8	2	
				南棺外	左				8	1	
福岡	若八幡宮	方円	(47)	北棺外	左		2	19	1		
滋賀	北谷11号	円	32	北槨外	右		17	9	7	1	鍬形石2
				南槨外	左		11		3		
奈良	上殿	円	30	西槨外							盾2
				西棺外			6	27			
				東棺外			21	45	30	23	革製草摺1
				東槨外							盾2
奈良	谷畑	円	27	西棺外		1	4				筒形銅器1
				東棺外			2		5	1	
福岡	大井平野1号第1主体部	円	23	北棺外	右			29	1		
奈良	タニグチ1号	円	20	東棺外	右		3	9			板甲1
				西棺外	左		4	6	13		筒形銅器2
				西槨外			6	3	8	5	
奈良	鴨都波1号	方	20	西槨外	右	3	2	25			靱1、板甲1
				東棺外							紡錘車形石製品1
				東槨外	左		2+	10			靱1、(弓1)、(盾1)
愛知	白山藪	(円)	(18)	北棺外	右		20	10	2		
徳島	前山	円	15	南棺外	右	1	1		7		
				北棺外	左		1				

凡例：墳形 方円＝前方後円墳、方方＝前方後方墳、帆立＝帆立貝形古墳、円＝円墳、方＝方墳。規模の単位はm。刀剣には槍・鉾を含む。工具には刀子・針・砥石を含む。() 内は推定。

表2 棺外・槨外の長辺に配置された副葬品（古墳時代中期前半）

所在	古墳名	墳形	規模	場所	左右	鏡	刀剣	鏃	工具	農具	その他
三重	石山 東槨	方円	120	西槨外	右		22	77			盾 5、不明鉄器 2
				東槨外	左		17	28			盾 3
静岡	堂山 1号棺	方円	110	南槨外			18	428+	42+	53	盾
大阪	和泉黄金塚 中央槨	方円	94	西槨外	右	1	19		13+	7+	不明鉄器 5+
				東槨外	左		1				
大阪	和泉黄金塚 東槨	方円	94	西槨外	右		4	113			盾 2、巴形銅器 3
				東槨外	左		1		2		
大阪	盾塚	帆立	73	北槨外	右						盾 4
				南槨外	左						盾 4
静岡	千人塚 第2主体部	帆立	58	北槨外	右			35			
				南槨外	左		1	40			
京都	鳥居前	方円	(54)	南槨外	右		1	7			巴形銅器 3、(盾 1)
				北槨外	左		2		2		巴形銅器 3、(盾 1)
京都	産土山	円	54	北槨外	右		4	2	10+		堅楯 1、不明鉄器 1
大阪	鞍塚	帆立	48	北槨外	右		4	10			馬具 11、刺突具 1、不明鉄器 2
				南槨外	左		1		7	1	鉄鋌 5、不明鉄器 3
静岡	五ヶ山 B 2号	方	33	北槨外	右		1	57			盾 1
				南槨外	左		5				盾 1
奈良	北原西	方方	31	北槨外	右			2	17+	5	玉類 177、軽石 2
滋賀	新開 1号 南棺	円	30	北槨外	右		2	6			盾 1
				南槨外	左		2				盾 2、馬具 39
和歌山	岩内 3号第1主体部	円	28	西槨外	右		3	19	23	14	堅楯 1
				東槨外	左		3	47	3	5	ガラス小玉 1
大阪	堂山 1号	円	25	北槨外			14				
				南槨外			11				
岐阜	龍門寺 15号	円	18	北槨外	右		1	7			
				南槨外	左		1		7+		
岐阜	龍門寺 1号	円	17	北槨外	右		2		5		
				南槨外	左			約 46	3	1	
奈良	兵家 1号	円	16	西槨外	左		2	100+			

凡例：表1と同じ

の副葬品が配置された古墳が見られる。三重県石山古墳東槨・大阪府和泉黄金塚古墳中央槨（図1－3）・同東槨では、長辺両側に副葬品が配置されるが、右側に配置数が偏る傾向にあり、特に和泉黄金塚古墳で著しい。表2に挙げた他の古墳でも、刀剣類や盾は左右に分置される傾向にあるものの、同種の副葬品が複数あっても片側に偏って配置されることが多い。中期前半の新相段階の大阪府鞍塚古墳では、右側の北槨外から槍・鏃・鉄鏃・馬具・刺突具（鉋状鉄器）、左側の南槨外から刀・農工具・鉄鋌などが出土した。棺を挟んだ左右で副葬品の種類が異なり、馬具も鞍・鐙・轡・辻金具などの一式が片側に配置された。馬具のセットが左右で分けられず、片側に配置される状態は滋賀県新開1号墳南棺でも見られる。

3. 配置行為の変異と埋葬儀礼

古墳時代前期～中期前半にかけて、棺の長辺における棺外・槨外の副葬品配置を概観すると、既に指摘されているように（光本 2001）、対称的な配置から非対称的な配置に推移することが

確認できる。しかし、前期の段階で非対称的な配置が行われた古墳が少なからず併存し、対称性の相違を単純に時期差と捉えることは難しい。事例の多い前期後半の古墳を中心に、棺外・槨外配置の対称性に変異が生じた要因を考えてみたい。

表1をみると、古墳時代前期に棺外・槨外で対称的な配置が行われた古墳は、墳丘規模が大きい前方後円（方）墳にあたる⁽⁴⁾。前期後半の古墳で例示すると、80 m以上の前方後円墳では、刀剣類と鏃の相補関係を除くと、左右両側の配置数の偏りが少ない。50～60 m前後の前方後円（方）墳では、対称的な配置の古墳と非対称的な配置の古墳が混在し、手古塚古墳・若八幡宮古墳のように、片側にしか配置しない古墳も見られる。さらに規模の小さい20～30 m前後の円墳では、配置が片側に偏る傾向が強くなる。北谷11号墳・上殿古墳・タニグチ1号墳は小規模な円墳ながら、副葬品の数量が50 m以上の前方後円墳に匹敵するが、これらの円墳に見られる非対称的な配置は前方後円墳の対称的な配置と様相を異にしている。

小規模な古墳で非対称的な配置が行われる傾向は前期前半に遡って認められる。静岡県新豊院山2号墳・福岡県潜塚古墳2号棺では40点以上の鏃が棺外・槨外に副葬されたが、いずれも片側のみの配置である。大阪府真名井古墳の粘土槨では、槨外長辺に配置された副葬品は少ないが、南槨外に配置数が偏る。配置状態のわかる前期前半の事例は少ないが、前期後半と同様に、墳丘規模60 m前後を境にして副葬品配置の対称性に相違が生じていた可能性がある。

古墳時代前期には古墳の墳丘規模と棺外・槨外の副葬品配置の対称性は相関関係にあり、墳丘規模が小さくなるほど、配置の対称性が失われる傾向を見いだすことができる。ただし、滋賀県雪野山古墳やタニグチ1号墳（図1-5）のように、配置数の少ない側に甲冑が置かれる場合があり、器物の大きさの違いを考慮すると、対称性の評価は容易ではない。また、墳丘規模が小さくなると、大規模な古墳に比べて副葬品の数自体が少なくなる傾向にある。しかし、同種の副葬品が複数あるにもかかわらず、左右に分置されず、片側に偏った配置は対称性が意図されていない行為と考えるとよいだろう。

副葬品の配置が長辺片側に偏る現象には葬送儀礼の人の動きが反映された可能性が提起されているが（鈴木1996）、その方向に左右や方位などの規則性は認められない⁽⁵⁾。一つの古墳に複数の埋葬施設が並行して設けられた場合には、石山古墳東槨や和泉黄金塚古墳東槨のように、隣接する埋葬施設に近い側の配置数が増える傾向は見られる。しかし、単独で営まれた埋葬施設でも副葬品の配置が片側に偏在する。また、50～60 m前後の前方後円墳と20～30 m前後の円墳で副葬品配置の対称性は異なるが、埋葬施設のある円丘部は両者でほぼ同じ大きさで、円丘部の墳丘構造が副葬品配置の対称性に影響を与えたとは考えにくい。

以上の状況を総合的に判断すると、古墳時代前期の大規模な前方後円（方）墳で執り行われた埋葬儀礼では、棺外・槨外に副葬品を並べる際に棺を挟んで対称的な配置になるよう企図されていたことがうかがえる。棺外・槨外の配置は畿内の主要古墳で顕著なことから、この配置

が行われた段階の儀礼が中央政権によって創出された葬送儀礼において最重要な場面であったと想定されている（福永 1999）。被葬者を納めた棺や埋葬施設を囲うような対称的配置は儀礼の荘厳性を高める作用をもたらしたとみられ、大規模墳の埋葬儀礼では地域を越えてこの配置方式が共有されていた状況を看取できる。

その一方で、小規模な古墳の埋葬儀礼では副葬品配置の対称性に対する思慮に欠け、儀礼が簡略化されていた可能性が高い。中央政権を構成する有力首長の墳墓で執行された埋葬儀礼が模倣されたのであれば、複雑な儀礼が部分的に省略されたか、伝播の過程で儀礼の要素が欠落したと想像できる。九州や関東地方の中規模の前方後円（方）墳では対称的な配置の古墳と非対称的な配置の古墳が混在し、配置方式や埋葬儀礼の受容が各地で均等に行われなかったとみてよい。こうした地域展開のあり方は個別の副葬品の配置でも認められ（宇垣 1997、三浦 2020）、儀礼の受容に対する多様な反応は畿内と各地の首長間関係の複層性を示唆している。

古墳時代中期になると非対称的な配置が増加し（光本 2001）、古墳の墳丘規模と副葬品配置の対称性の相関は認められなくなる。大規模な前方後円墳で非対称的な配置が行われる一方で、小規模な円墳の一部に対称的な配置が見られるなど、前期古墳に比べて錯綜した様相を呈するようになる。中期前半には畿内を中心に有力首長墓で採用された長持形石棺と前期以来の長大な木棺が併存しており（上田 2022）、棺の形態差を超える副葬品配置の規範が顕在化しにくかったと考えられる。中期に副葬品配置で典型的な様相が見られなくなること（寺沢 2006）は配置方式が共有されていなかったことを示しており、前期からの著しい変容と言えよう。

おわりに

本稿では、古墳時代前期に古墳の墳丘規模と棺外・槨外の副葬品配置の対称性が相関し、規模が小さくなると非対称的な配置が増えることを明らかにした。中期前半に非対称的な配置が多い状況も考え合わせると、前期に大規模の古墳で行われた対称的な配置の特異性が際立つ。前期の段階では副葬品配置の対称性は階層的位相に関わる事象として把握できる。

従来の研究では、被葬者を囲むように配置された副葬品は辟邪の効果（寺沢 2006、藤原 2012）や被葬者身体との関係性（光本 2001）が注目されてきた。古墳時代前期に中小規模の古墳で副葬品配置が長辺片側に偏在するケースが多いことを勘案すると、辟邪のような副葬品に対する観念が社会全体に広く通底し、埋葬時の配置で必ず表現されていたとは考えにくい。副葬品配置や埋葬儀礼の共通性ととも、その受容の多様なあり方が古墳時代前期の政治構造や社会関係を反映している可能性を提示しておきたい。

本稿では棺外・槨外の長辺側の配置に焦点を絞ったが、棺内を含めて副葬品配置の全体を総合的に検証すべきことは言うまでもない。また、配置された副葬品の器種組成（光本 2001）

も重要な観点で、中期前半の鞍塚古墳で認められた同種型の配置は前期後半の奈良県鴨都波 1 号墳に遡る可能性がある。遺存しにくい有機物製の副葬品を考慮に入れる必要もあり、残された課題は多いが、本稿が複雑な副葬品配置を解明する一助になれば幸いである。なお、事例として列挙した各古墳の報告書の出典は紙幅の都合で割愛した。ご海容をお願いしたい。

註

- (1) 棺外・槨外に配置された副葬品が少ない古墳は対称性の検討が難しいため、表に取り上げていない。盗掘等により攪乱を受けて棺外・槨外の配置数が把握できない事例、報告書で数量の記載のない事例も提示していない。なお、横穴式石室は竪穴系埋葬施設と埋葬の原理が異なるため、対象外とした。
- (2) 本稿の左右は被葬者から見た棺の長辺側の位置を示す。表 1・2 では、頭位の異なる複数人が埋葬された事例、被葬者の頭位がわからない事例は左右を記していない。
- (3) 刀剣類の数量は刀・剣・槍・鉾を合わせた総数である（表 1・2）。
- (4) 棺外に配置された副葬品の詳細な数が不明なため、表 1 に挙げていないが、京都府長法寺南原古墳・京都府寺戸大塚古墳前方部石槨・滋賀県安土瓢箪山古墳後円部中央石槨・静岡県三池平古墳でも対称的な棺外配置が認められる。これらは墳丘長 60 m 以上の前方後円（方）墳である。
- (5) 前方部に近い側に配置が偏ると指摘されているが（鈴木 1996）、本稿で取り上げた事例でそれに該当する古墳は若八幡宮古墳のみである。

引用・参考文献

- 今尾文昭 1984「古墳祭祀の画一性と非画一性—前期古墳の副葬品配列から考える—」『橿原考古学研究所論集』第 6 吉川弘文館、東京：pp. 111-166
- 今尾文昭 2009『古墳文化の成立と社会』（古代日本の陵墓と古墳 1）青木書店、東京
- 岩本 崇 2004「副葬配置からみた三角縁神獣鏡と前期古墳」『古代』第 116 号 早稲田大学考古学会、東京：pp. 87-112
- 上田直弥 2022『古墳時代葬制秩序と政治権力』大阪大学出版会、大阪
- 宇垣匡雅 1997「前期古墳における刀剣副葬の地域性」『考古学研究』第 44 巻第 1 号 考古学研究会、岡山：pp. 72-92
- 黒田恭正 1988「馬具の出土状態について」『日野昭博士還暦記念 歴史と伝承』日野昭博士還暦記念会、京都：pp. 119-147
- 小林行雄 1941「竪穴式石室構造考」『紀元二千六百年記念史学論文集』京都帝国大学文学部、京都：pp. 1147-1168
- 小林行雄 1956「前期古墳の副葬品にあらわれた文化の二相」『京都大学文学部五十周年記念論集』京都大学文学部、京都：pp. 721-744

- 小林行雄 1959『古墳の話』岩波書店、東京
- 鈴木一有 1996「前期古墳の武器祭祀」『雪野山古墳の研究』考察編 八日市市教育委員会、滋賀：pp. 145-174
- 鈴木一有 2014「七観古墳出土遺物からみた鋳留技法導入期の実相」『七観古墳の研究—1947年・1952年出土遺物の再検討—』七観古墳研究会、京都：pp. 353-380
- 寺沢知子 2006「副葬品出土状況の類型」『大和の古墳Ⅱ』近畿日本鉄道株式会社、大阪：pp. 67-79
- 橋本達也 2005「古墳時代中期甲冑の出現と中期開始論—松林山古墳と津堂城山古墳から—」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』大阪大学考古学研究室、大阪：pp. 539-556
- 福永伸哉 1995「三角縁神獣鏡の副葬配置とその意義」『日本古代の葬制と社会関係の基礎的研究』大阪大学文学部、大阪：pp. 25-43
- 福永伸哉 1999「古墳の出現と中央政権の儀礼管理」『考古学研究』第46巻第2号 考古学研究会、岡山：pp. 53-72
- 福永伸哉 2000「古墳における副葬品配置の変化とその意味—鏡と剣を中心に—」『待兼山論叢』第34号史学篇 大阪大学文学部、大阪：pp. 1-24
- 藤田和尊 1989「武器・武具」『季刊考古学』第28号 雄山閣、東京：pp. 39-43
- 藤原 哲 2012「副葬品配列からみた武器の価値—軍事組織復元の可能性—」『総研大文化科学研究』第8号 総合研究大学院大学文化科学研究科、神奈川：pp. 195-219
- 松木武彦 2020「おわりに—世界の中の日本の古墳—」『日本の古墳はなぜ巨大なのか 古代モニュメントの比較考古学』吉川弘文館、東京：pp. 254-262
- 三浦俊明 2020「腕輪形石製品の副葬配置とその地域性」『古代学研究』第225号 古代学研究会、大阪：pp. 1-18
- 水野敏典 2022「黒塚古墳にみる武器副葬とは何か—古墳時代前期前半の武器副葬の一樣相—」『古代武器研究』Vol. 17 古代武器研究会、奈良：pp. 59-78
- 光本 順 2001「古墳の副葬品配置における物と身体分類及びその論理」『考古学研究』第48巻第1号 考古学研究会、岡山：pp. 96-116
- 用田政晴 1980「前期古墳の副葬品配置」『考古学研究』第27巻第3号 考古学研究会、岡山：pp. 37-54

挿図出典

図1：以下を一部改変して転載

1：奈良県立橿原考古学研究所（編）2018『黒塚古墳の研究』八木書店、2：森浩一・寺沢知子（編）1990『園部垣内古墳』同志社大学文学部文化学科考古学研究室、3：末永雅雄・島田暁・森浩一 1954『和泉黄金塚古墳』（日本考古学報告第5冊）綜芸舎、4：西田弘 1961『北谷古墳群発掘調査概報』滋賀県教育委員会、5：奈良県立橿原考古学研究所（編）1996『タニグチ古墳群発掘調査報告』高取町教育委員会、6：伊藤秋男（編）1977『白山藪古墳発掘調査報告』（人類学研究所紀要第6号）南山大学人類学研究所